

科目名	理学療法概論				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 1年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	201教室
授業概要	理学療法の概念・歴史・方法や対象などについて説明し、理学療法の専門科目を学んでいくための基礎を作ることを主眼として、理学療法の全体像を総合的・体系的に概説する。								
一般目標	r								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法シリーズ 理学療法概論テキスト 第2版（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域） 1・理学療法概念・歴史を説明できる 2・理学療法に関連する法規を説明できる 3・理学療法の主な領域について説明できる。 4・理学療法の対象となる病態について説明できる。 5・理学療法の対象となる疾患について説明できる。		
技術（精神運動領域） なし		
態度（情意領域） 積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	理学療法学科カリキュラムの概略	・4年間で学ぶ概略を説明できる。
2	理学療法の定義・歴史	・理学療法の歴史と定義について説明できる。
3	理学療法と障害・理学療法の対象	・理学療法の対象について説明できる。
4	理学療法の流れ	・理学療法の流れとクリニカルパスについて説明できる。
5	理学療法士に求められる資質、接遇、コミュニケーション	・理学療法士としてふさわしい接遇がイメージできる。
6	理学療法を構成する核技術の概要 ①運動療法	・運動療法の概略が説明できる。
7	理学療法を構成する核技術の概要 ①物理療法	・物理療法の概略が説明できる。
8	理学療法を構成する核技術の概要 ①日常生活活動練習	・日常生活活動練習の概略が説明できる。
9	感染予防	・感染予防が実施できる。
10	作業療法概論	・作業療法の仕事の概要が説明できる。
11	理学療法士が働く現場①（金井 和明）	・急性期の理学療法士の仕事について説明できる。
12	理学療法士が働く現場②（金井 恵美）	・回復期の理学療法士の仕事について説明できる。
13	理学療法士が働く現場③（塚本 彬史）	・生活期の理学療法士の仕事について説明できる。
14	理学療法士が働く現場④	・スポーツ領域の理学療法士の仕事について説明できる。
15	まとめ	・理学療法の仕事について説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣、金井 和明、他		実務経験紹介	理学療法士として回復期、生活期の多様な病院・施設に勤務経験あり	

科目名	理学療法評価法A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 1年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	301教室・治療室
授業概要	理学療法分野における検査は、対象者に何らかの刺激・情報をinputし、そのoutputの質量を特定の基準により判定するものであり、測定と同様に理学療法介入に先立って行われる。理学療法評価の中で、形態を把握すること（形態測定）、関節の自動・他動での可動範囲（関節可動域）を測定・把握することについて学ぶ。								
一般目標	理学療法評価の中で、形態測定の意義・方法を理解し手順の知識を身に着ける。関節可動域測定の意義・方法を理解し、上肢・下肢・体幹の手順の知識を習得する。								
テキスト 参考書等	図解 理学療法検査・測定ガイド （文光堂）								

到達目標		
知識（認知領域） 形態測定の検査の方法、意義、目的が記述できる。 四肢・体幹の関節可動域の参考可動域、基本軸、移動軸が記述できる。		
技術（精神運動領域） なし		
態度（情意領域） 授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	理学療法評価の目的・意義、検査の基本原則	理学療法評価の目的・意義、検査の基本原則が説明できる。
2	情報収集と情報管理	理学療法評価の中で必要な情報の種類・方法・管理を説明できる。
3	形態測定①	形態計測の定義・意義・検査のポイント・体格の検査を説明できる。
4	形態測定②	四肢長・肢節長の検査・測定方法を説明できる。
5	形態測定③	四肢周径の方法を説明できる。
6	関節可動域検査①	関節可動域検査の定義・意義・分類・検査のポイントを説明できる。
7	関節可動域検査②	上肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
8	関節可動域検査③	上肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
9	関節可動域検査④	上肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
10	関節可動域検査⑤	下肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
11	関節可動域検査⑥	下肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
12	関節可動域検査⑦	下肢の関節可動域検査の方法が説明できる。
13	関節可動域検査⑧	体幹の関節可動域検査の方法が説明できる。
14	関節可動域検査⑨	体幹の関節可動域検査の方法が説明できる。
15	関節可動域検査⑩	全ての関節可動域検査の方法が説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	友原 望美		実務経験紹介	理学療法士として回復期・維持期における理学療法評価に携わった経験あり。	

科目名	理学療法評価法B					単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 1年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	治療室	
授業概要	身体機能において筋力測定は重要な評価方法の一つである。特に、機器を使用せずに筋を個別に評価することができる徒手筋力検査法は理学療法士として必須の評価方法である。授業では、筋力低下の病態とそのメカニズムの理解からはじめ、測定における原理・原則、頭部・上肢・体幹・下肢の筋の測定時のポイントについて、実技を通じて基本的な知識・技術を修得する。									
一般目標	・徒手筋力検査法の段階づけ・検査肢位について知識・技術を修得し、実施できる。									
テキスト 参考書等	教科書：新・徒手筋力検査法 原著第10版(協同医学出版社) 参考書：図解 理学療法検査・測定ガイド(文光堂)、MMT適切な検査肢位の設定と代償運動の制御(medical view)、MMTナビ臨床で役立つ徒手筋力検査法(Round Flat)									

到達目標		
知識（認知領域） ・徒手筋力検査の原理・原則を説明できる。 ・徒手筋力検査における段階づけの判定基準を説明できる。 ・徒手筋力検査において、検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作を説明ができる。		
技術（精神運動領域） ・目的とする筋の触診ができる。 ・適切な徒手抵抗により抑止テストを実施できる。 ・適切な声掛け、代償動作の抑制、抑止テスト、段階づけの判断など、徒手筋力検査における一連の測定方法を遂行できる。 ・姿勢別に徒手筋力検査の項目を列挙できる。 ・姿勢別に徒手筋力検査を実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加できる。		
回数	授業内容	授業目標
1	徒手筋力検査法の意義・目的	・筋力の種類・評価方法を説明できる。 ・MMTの意義・目的を説明できる。
2	段階づけと抑止テスト	・段階づけの判定基準を説明できる。 ・抑止テストを実施できる。
3	上肢の徒手筋力検査① 肩甲骨外転と上方回旋、肩外転、肘伸展、手関節屈曲	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
4	下肢の徒手筋力検査① 股関節屈曲、股関節外転、膝伸展、足関節底屈	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
5	頭部・体幹の徒手筋力検査① 体幹伸展、骨盤挙上、体幹屈曲	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
6	学習到達度確認① （筆記・演習）	・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査の方法を説明できる。 ・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査を実施できる。
7	上肢の徒手筋力検査② 肩関節屈曲、肩関節伸展、肩関節水平外転、肩関節水平内転	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
8	下肢の徒手筋力検査② 股関節屈曲・外転・外旋と膝屈曲、股関節伸展、股関節内転	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
9	頭部・体幹の徒手筋力検査② 頭部伸展、頭部伸屈、頭部屈曲、頭部屈曲、頭部回旋、コアテスト	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
10	学習到達度確認② （筆記・演習）	・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査の方法を説明できる。 ・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査を実施できる。
11	上肢の徒手筋力検査③ 前腕回外、前腕回内、手関節屈曲、手関節伸展	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
12	下肢の徒手筋力検査③ 股関節外旋、股関節内旋、膝屈曲、足関節の背屈と内がえし	・該当する筋を触診できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。 ・段階ごとの検査肢位・固定方法・評価基準・代償動作に留意し、検査を実施できる。
13	学修到達度確認③ （筆記・演習）	・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査の方法を説明できる。 ・これまでに学修した範囲において、徒手筋力検査を実施できる。
14	脳神経支配筋のテスト	・脳神経支配筋における段階づけを説明できる。 ・段階ごとの検査方法を説明できる。
15	姿勢別評価	・姿勢別に徒手筋力検査の項目を列挙できる。 ・指定された姿勢に対して、徒手筋力検査を実施できる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に勤務し、理学療法評価に携わってきた。	

科目名	日常生活活動A					単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 1年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室	301教室, ADL室	
授業概要	日常生活活動と理学療法士の関わりについてや生活に不可欠な身の回り動作を理解し, ADL動作の評価方法や指導方法について学んでいく。また, パーセルインデックスやFIMといった必須評価について事例を通じ, 適切な採点方法を学修する。									
一般目標	・理学療法士として必要なADL評価の手法や特徴について知識を修得する。 ・自助具および福祉機器の名称と使用目的について知識を修得する。									
テキスト 参考書等	理学療法学テキスト 日常生活活動学 (Medical View) その他, 必要な資料を適宜配布する。									

到達目標		
知識(認知領域)		
・ADLの概念を説明できる。 ・ADLの評価方法やADL動作の指導方法について説明できる。		
技術(精神運動領域)		
・杖の調整や車椅子操作を安全に実施できる。 ・パーセルインデックスやFIMについて, 採点基準を理解し, 適切に採点できる。 ・ICFを用いて情報を整理できる。 ・情報をICFのコードに分類できる。		
態度(情意領域)		
授業に積極的に参加できる。		
回数	授業内容	授業目標
1	日常生活活動の概念	・日常生活活動, 基本的日常生活活動, 手段的日常生活活動を説明できる。 ・ICFの構成要素を説明できる。 ・QOLを説明できる。
2	起居動作	・起居動作の特徴を説明できる。 ・起居動作の練習方法および支援・援助方法を実践することができる。
3	車いす・座位保持装置	・車いすの各部位の名称を説明することができる。 ・車いすの違いを理解し, 利用者の残存能力に応じた車いすの選び方を検討することができる。
4	車いす操作	・車いす駆動, キャスター上げを実施することができる。
5	移乗動作	・移乗動作の目的や留意点を説明することができる。 ・手順のポイントを理解し, 多様な移乗動作を実施することができる。
6	歩行補助具	・歩行補助具の種類を理解し, その目的や適合方法を理解する。 ・杖・松葉杖の長さ調整を行うことができる。
7	移動動作・歩行	・移動は転倒リスクを伴う動作であることを理解し, リスクを最小限にした安全な歩行パターン及び段差昇降パターンを説明できる。
8	セルフケア・IADL	・セルフケア動作およびIADLに関する細目動作と工程を説明できる。 ・セルフケア動作およびIADLの動作改善に向けた推論に基づき, 具体的な支援法を説明できる。
9	日常生活用具・自助具	・日常生活用具の項目を理解し, 貸与・購入等の区別を説明できる。 ・介護保険等の利用者負担額を説明できる。 ・福祉用具データベースを利用し, 目的とする福祉用具を検索できる。
10	パーセルインデックス	・BIの項目と点数を説明することができる。 ・BIのメリット・デメリットを説明することができる。 ・BIを使用し, 評価を行うことができる。
11	FIM①	・FIMの項目と点数を説明することができる。 ・FIMのメリット・デメリットを説明することができる。 ・FIMの採点基準を説明できる。
12	FIM②	・具体例を通じ, FIMの採点基準に則った採点が行える。 ・提示された症例のFIMを採点できる。
13	各種日常生活活動の評価方法	・日常生活活動に関連する様々な評価方法を説明できる。 ・シチュエーションに応じて, 必要な評価方法を列挙できる。
14	国際生活機能分類ICF	・症例情報をICFに分類できる。 ・ICFの分類コードおよび評価点を説明できる。
15	学修到達度確認 (演習, 筆記)	・これまでに学修した知識・技術を説明できる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関で従事し, ADL指導などの業務に携わってきた。	

科目名	生活環境論					単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT1年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	201教室	
授業概要	理学療法士として患者様の治療を考えると、生活環境を前提として治療目標を立案することが不可欠である。QOLを向上させるためにも環境面へのアプローチを提案できなくてはならない。本授業では生活環境に対する基礎知識と考え方を学習し、福祉住環境コーディネーター2級検定試験受験の準備をすすめる。									
一般目標	住宅改修と福祉用具についての基本的知識を習得する。									
テキスト参考書等	福祉住環境コーディネーター検定試験3級公式テキスト(東京商工会議所編)									

到達目標		
知識(認知領域)		
①住環境整備のために理学療法士として必要な知識(社会制度、家屋改修・福祉用具の導入のポイント)を説明できる。		
②障害モデルごとの住環境整備のポイントを説明できる		
技術(精神運動領域)		
なし		
態度(情意領域)		
授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	福祉住環境整備の重要性・必然性	・福祉住環境整備の重要性について説明できる。
2	高齢者の健康と自立	・高齢者の健康の特徴について説明できる。
3	バリアフリーとユニバーサルデザイン	・バリアフリーとユニバーサルデザインについて説明できる。
4	少子高齢社会と共生社会への道	・日本の少子高齢社会について説明できる。認知症サポーターになる。
5	住環境整備の基本技術①段差	・段差や床材の家屋改修について説明できる。
6	住環境整備の基本技術①手すり	・手すりの基本事項について説明できる。
7	住環境整備の基本技術①建具	・建具、スペースへの配慮の基本事項について説明できる。
8	住環境整備の基本技術①トイレ	・トイレに関する家屋改修について説明できる。
9	生活行為別整備の手法①外出	・玄関回りの改修を中心に、外出支援に関する家屋改修について説明できる。
10	生活行為別整備の手法②屋内移動	・廊下や階段など屋内移動に関する家屋改修について説明できる。
11	生活行為別整備の手法③排泄	・トイレに関する家屋改修について説明できる。
12	生活行為別整備の手法④入浴	・風呂と脱衣所に関する家屋改修について説明できる。
13	生活行為別整備の手法⑤その他	・家屋改修一般の適応方法について説明できる。
14	福祉用具①起居・就寝・移動	・起居、就寝、移動に関わる福祉用具について説明できる。
15	福祉用具②排泄・入浴	・排泄、入浴に関わる福祉用具について説明できる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
学外テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	松原 早苗		実務経験紹介	訪問理学療法に15年間従事し、担当症例の家屋改修や福祉用具導入に関わる	

科目名	理学療法セミナー					単位数	1	時間数	30	
授業形態	演習	対象学生	PT 1年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室	301教室	
授業概要	カリキュラムが進行するにつれ、基礎分野から専門基礎分野、専門分野へと推移する。とりわけ専門基礎分野は今後学ぶ専門分野の基盤となるため、解剖学・生理学・運動学などの知識の定着は必須である。理学療法セミナーでは、これまでに学修した専門基礎分野における知識の学修到達度を確認した上で、国家試験水準の知識定着を図る。授業は前期8コマ、後期7コマで進行し、各期末においてCBTを行う。CBTは事前に提示している学修範囲の正答率が90%以上となるまで行う。									
一般目標	・解剖学・生理学・運動学の知識を国家試験水準で身につける。 ・自己学習習慣を身に付ける。									
テキスト 参考書等	基礎固め ヒント式トレーニング 改訂第2版 基礎医学偏(南江堂) 生体のしくみ標準テキスト第3版 新しい解剖整理(医学映像教育センター), Visualearn(医学映像教育センター)									

到達目標		
知識(認知領域) ・解剖学、生理学、運動学の知識について説明できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、各選択肢の正解・不正解の理由を説明できる。		
技術(精神運動領域) ・KJ法やブレインストーミングなどの手法を用い、周辺知識を関連付けて情報を整理できる。 ・学修到達度を把握し、無理のない自己学修スケジュールを立てることができる。		
態度(情意領域) ・授業に積極的に参加することができる。(周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する) ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	基礎医学における知識の整理① 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
2	基礎医学における知識の整理② 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
3	基礎医学における知識の整理③ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
4	基礎医学における知識の整理④ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
5	基礎医学における知識の整理⑤ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
6	基礎医学における知識の整理⑥ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
7	基礎医学における知識の整理⑦ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
8	基礎医学における知識の整理⑧ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
9	基礎医学における知識の整理⑨ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
10	基礎医学における知識の整理⑩ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
11	基礎医学における知識の整理⑪ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
12	基礎医学における知識の整理⑫ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
13	基礎医学における知識の整理⑬ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
14	基礎医学における知識の整理⑭ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
15	基礎医学における知識の整理⑮ 学修到達度確認	・専門基礎分野(解剖学・生理学・運動学・その他)の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	教員として国家試験対策に携わってきた	